

「科学者」はいつからいたのか



上) パリ王立科学アカデミー1666年創立時のメダル(科学アカデミー文書館所蔵)

彫られている文字は「自然の秘密を探究することと技芸の完成のために捧げられた王立科学アカデミー、1666年」

右) 科学アカデミーとその庇護者達 (Goyton 画、Sébastien Leclerc 製作、銅版画、1671)



「科学者」がいなかった時代

私の専門分野は科学技術史です。特に、十八世紀のフランスを中心に、「科学者」という集団が歴史の中でどんな風に出現してきたかという問題を扱っています。

現代のように、大学が自然科学の研究

究者の場所と言える状態になったのは一九世紀前半のことです。それ以前、大学は中世の大学の構造を受け継ぎ、神学部・法学部・医学部が中心でした。自然科学——当時は主に自然哲学 Natural philosophy もしくはフランスなら自然学 Physique などと呼ばれましたが——はその外で発達した学問です。そのため、研究交流活動はアカデミーという別の組織の中で盛んになっていたのです。一七一八世紀の間で欧州全体に二〇〇以上のアカデミーが誕生しています。

前史としてのパリ王立科学アカデミー

私はその中で最も古い機関の一つ、一六六六年に生まれたパリ王立科学アカデミーについて研究しました。当時は「科学者」という呼び名も、職業もなかったわけですが、このアカデミーの会員は王に庇護され、研究をすることで「年金」を得るという待遇を確立しました。また、自然科学だけを扱う組織として最初のものであり、英国のロイヤル・ソサエティ(ニュートンが所属していました)とならび欧州に影響力を持ちました。そのため、後の「科学者」と呼ばれる集団が有することになる価値観や働き方のモデルの一部がそこで形成されたと考えることができます。私は、このアカデミーが社会的に大変不安定な状態から、次



Sayaka Oki

●1975年東京都生まれ。東京大学教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科を経て10年、広島大学総合科学研究科へ。専門は科学技術史。

「公共善」への情熱と科学

第に安定した地位と発言権を獲得していく過程を検証しました。

社会的な側面を掘り下げるのと並行して、科学の「有用性」(utile)や「公共善」(bien public)という、当時の学者達が、科学研究を行うことを正統化する際に掲げていた理念に着目し、その概念史的な変遷を検討しました。その結果わかったのは、ごく大まかに言って、一八世紀の後半に入ると、理論科学固有の価値を「有用性」の観点から論じようとしたり、「公共善」を王権への奉仕という文脈ではなく、公共圏(国家そのものではない、議論する人々から成る市民社会)への貢献という考えに近づけようとしたりする傾向がみられることです。

十八世紀後半は、社会全体で公衆衛生や都市工学、そして政治改革に関心が高まる時代でもあるのですが、科学の研究者も啓蒙思想の影響を受けて、そこに積極的に参画しました。そして、科学アカデミー学者は公共事業とどう関わるべきか、数学は社会現象を扱えるのかといった問いに取り組みました。

結果的に科学アカデミーは革命期に一度廃止されてしまうのですが、これらの経験がフランス革命期以降の科学の専門職業化にどのように影響したのか、ということも調べています。